

第15回 町長定例記者会見

- 開催日時 平成29年12月6日（水）午後1時30分～
- 開催場所 遠軽町役場2階応接室
- 記者数 4人

報道機関の皆様におかれましては、日頃より町政など地域の情報を町民にお届けいただいております。心からお礼申し上げますとございます。

それでは、今回の議題についてお話しさせていただきたいと思っております。

■平成29年第8回遠軽町議会（定例会）に提出する案件から

遠軽町商工業振興条例及び遠軽町企業振興促進条例の改正についてであります。

これは簡単に言うと、企業誘致等にも使われる、工場ができれば支援する、お店を直すのに支援するというものでございます。

企業立地の促進や中小企業者等に対する助成を行う本条例につきまして、一部適用期間が平成30年3月31日をもって終了することから、これを4年間延長する条例改正を行うものでございます。これは法律でいう時限立法でありまして、私が町長になってからもずっと延長してきております。

また、これに併せて、遠軽町商工業振興条例のうち、店舗近代化の対象業種を、これまでの小売業及び飲食サービス業に加えて、新たに理美容業やクリーニング業などの生活関連サービス業にも拡大したいと思っております。

近年、高齢化が進む中、地域において日常生活を営むのに必要な店舗の開業や近代化に、この助成制度を利用させていただきたいと考えております。

■石北本線の維持、存続について

「JR単独では維持することが困難な線区」となっている石北本線につきましては、オホーツク圏活性化期成会を中心に、広報活動や講演会、利用実態に関する調査などを行ってきております。

このような中、10月18日に高橋はるみ北海道知事が来町し、沿線関係者との意見交換会が行われ、オホーツク圏活性化期成会会長の辻直孝北見市長をはじめ、沿線関係者から、住民の生活と物流に果たす石北本線の役割と重要性を報告する機会がありました。これに対し、高橋知事からは、北海道が主体となって積極的に取り組む、とのお話をいただいたところであります。知事がこういう発言をされたのは初めてではないかと思っております。

また、JR北海道の協力を得て、沿線自治体の特産品の車内販売を行います。販売は12月16日から2月4日の年末年始を除く土日のうち、オホーツク1号の遠軽・網走間、大雪4号の美幌・遠軽間にて実施をいたします。このうち遠軽町からは1月27日と2月3日、4日の3日間を予定しております。詳しい内容は、JR北海道のプレスリリースをご覧くださいと思います。

さらに、本町におきましては、遠軽商工会議所、えんがる商工会、えんがる町観光協会などの関係機関にご参加をいただき「遠軽町石北本線利用促進協議会」を設立いたします。この協議会ではJR石北本線の利用促進策の検討や、地域住民のマイレール意識の高揚を図る事業などを行う予定でありまして、8日に設立総会を開催いたします。

今後とも、人だけではなく、オホーツクの農産物を運ぶ鉄道として欠かせない石北本線の維持、存続に向けて、全力で取り組んでまいります。

■若手職員による政策提案プロジェクトチームの設置について

町政全般にわたる政策課題に対し、若手職員が提案を行い、町政に反映させることを目的に「遠軽町若手職員政策提案プロジェクトチーム」の設置要綱を制定いたしました。

このプロジェクトチームは、政策課題の調査研究や政策提案を求める事案が生じたときに、その都度、設置するものでありまして、現在、特に遠軽IC道の駅や（仮称）えんがる町民センターの建設など、さまざまなアイデアが求められる事業が山積していることから、これらの課題解決とともに、若手職員の企画力向上や潜在能力を引き出すために制定したものであります。

そしてこのたび、この制度を利用したプロジェクトチームの第1号として「都市再生タスクフォース」を編成します。

これは現在、（仮称）えんがる町民センターの建設や、町道岩見通の改良工事をはじめとする「基幹事業」と、地域の創意工夫を生かしたハード事業、そして、まちに魅力と潤いをもたらすソフト事業の「提案事業」によりまして、中心市街地に新たな賑わいを生み、交流の場をつくるため、「都市再生整備計画事業」を実施するところであり、これに向けて各種事業の企画立案を行うために、20代から40代までの若手職員により編成するものであります。

このプロジェクトチームからさまざまなアイデアが出され、若者の視点でおしゃれな町並みができ、市街地中心部に人々が集まるような事業が生み出されることを期待するものであります。

■遠軽IC道の駅の駅長候補者について

旭川紋別自動車道の建設工事に合わせて整備を進めております、遠軽IC道の駅につきまして、管理運営の中心を担っていただく駅長候補者を7月に募集いたしました。

その中から、駅長候補者として佐藤茂（しげる）さんが、えんがる町観光協会に採用となり、11月1日に赴任し、準備に携わっていただいておりますのでご報告をいたします。

佐藤さんは、岩手県出身で、主に農村公園を開設・運営する民間企業に長く勤務され、道の駅や都市公園、遊園地、高速道路のサービスエリアなどで、新規事業の立ち上げから主に売店の準備・オープン・運営までの責任者として携わってきた経歴をお持ちです。

道の駅の整備については、佐藤さんに主体的に関わっていただき、町民に足しげく通っていただくとともに、オホーツク地域を訪れる皆様にも末永く愛されるような施設となるよう取り組んでまいります。

これにつきましては、施設が完成直前とかに決定するのが通常かと思っておりますけれども、それ以前に中の運営をどうするか、という時から責任を持って関わってもらいたいということで、今の時期から仕事に就いてもらうということにしたところでございます。全国から20人の応募があり、そこから選ばれた方です。

■合併市町連携会議による合併特例債及び合併推進債の発行期限延長要望について

これらの財政措置ですが、これは合併市町村のまちづくりのための建設事業に活用するため、合併年度とこれに続く10年間を発行期限とした制度として創設されました。

その後、平成23年3月に発生した東日本大震災を受けまして、被災市町村は10年間、それ以外の市町村は5年間の発行期限延長がなされたところであります。

しかしながら、市町村建設計画の事業実施にあたっては、住民との合意形成に時間を要することや、市町村合併に伴う投資的事業が山積みとなり、財政負担の平準化を図りながら事業を進めなければならないことから、進捗が遅れているところでもあります。

また、去年は熊本地震や豪雨災害に対し、復旧復興事業を優先させるため、国の予算化が遅れたことや、北海道においても大雨による甚大な災害が発生したため、計画どおりに事業が進められない団体も出てきているところであります。

全国的に見ても、同様の要望をする動きがあり、私ども北海道合併市町連携会議といたしましても、合併特例債と合併推進債の発行期限を東日本大震災の被災団体と同様の期限に延長されるよう、総務省や地元選出の国会議員の皆さんに要望を行ったところであります。

合併市町村のまちづくりが円滑に進められるよう、私ども地方の声が国に届くことを期待をしたいというところであります。

北海道では、この会議をつくった時から私が会長を務めております。これによって合併特例債の延長運動をいたしました。これが無ければごみの焼却炉完成、今は仮でオープンしていますが、これもできなかつた。遠軽では色々な事業が全くできなかつたということになるのを、延長してもらうようにつくった組織でありまして、合併特例債よりもさらに重大な地方交付税も、私どもが全国に先駆けて発案して、これが減らないように認めてもらったということで、これがあるから今の遠軽町とこれから先の遠軽町が見越せるということでありまして、これは合併したところはみんな同じであります。そういったことに動くためにつくった会議でございます。

■えんがるクリーンセンターについて

遠軽地区広域組合が、平成25年度から総工事費約40億円をかけて整備を進めてきた、新しいごみ焼却施設「えんがるクリーンセンター」が今月末に完成し、平成30年1月4日より本稼働いたします。

この施設は、組合を構成する遠軽町・湧別町・佐呂間町の可燃性ごみを処理する施設で、1日に32トンのごみを焼却できる施設であり、従来の可燃性ごみに加えて、これまで埋め立て処理していた、資源とならないプラスチック製品やゴム・ビニール製品類なども焼却処理することができる施設であります。

さらに、焼却時に発生する熱源を、施設内の給湯や暖房、構内道路のロードヒーティング、焼却に必要な送風に利用するなど、エネルギーの活用や、高度な排ガス処理機器を設置し、厳しい自主規制値を設定して運転するなど、環境に配慮した施設でもあります。

また、見学ホールや研修室も備えており、学習や、これからのごみ処理の在り方などについて、住民の皆さんと一緒に考えていく施設として活用していただき、ごみの分別や減量化、リサイクルなど、循環型社会の形成推進に向けて、さらに町民の皆さんのご理解、ご協力をいただきながら、適正な廃棄物処理を進めてまいります。

なお、施設の完成を記念して、1月12日午前10時から現地にて施設をご案内する予定であります。詳細につきましては別途、皆様にもご案内いたしますので、施設を見ていただきたいと思っております。

一つ大きいのは、旭野の埋め立て処分場がありますけれど、そこが埋め立てを予定していた期間の半分しか持たないという状況になりました。なぜかという、燃やせないものが多くなってしまって、埋め立てせざるを得なかつたからです。また埋立地を造らなければいけないというようなことになるぎりぎりに間に合って完成するというところであります。これは、合併の時の優遇策がありましたけれども、これが影響するので、そういう運動をしてきたということでもあります。

■遠軽地区地域医療対策連携会議の取り組みについて

去る11月19日、自治医科大学の坂東政司教授と、元メジャーリーガーの斎藤隆さんを招いて、「世界の野球から学ぶ地域医療の未来予想図」をテーマに、地域医療を考えるシンポジウムを開催いたしました。

坂東先生は、肺の有名な権威の先生でございます。坂東先生から、地域医療とは何かというお話から、地域医療の充実には地域の活性化が必要であることや、地域全体で医療を考え

ることが訴えられ、斎藤隆さんからは、野球に限らずスポーツによって健康を維持することで、地域医療を支えることにもつながるといってお話がありました。

このシンポジウムを通じて「みんなで育む地域医療」のきっかけとして、大きな一歩となることを願うところであります。

これにつきましては、医療という関係で事業をしておりますが、斎藤隆さんはメジャーリーガーで、今でも彼の日本人大リーガーの最速記録は破られていない。超一流の選手で、人間的にも素晴らしい方でありまして、講演会の前には遠軽地区の子どもたちを呼んで野球教室をやった後で講演会をやったわけでございます。何でこういうことになったかということ、遠軽には野球の関東の強豪校がずっと合宿に来ております。私どもが積極的に誘致して、遠軽高校のためにということをやっている訳ですけども、そういったつながりで坂東先生と縁ができて、産婦人科医がいないときにも坂東先生のいる自治医科大学まで行ってお願いもしてきたというご縁でやってきたということでございます。

次に、雑誌への広告記事掲載についてであります。

昨年の週刊文春に続きまして、今年は12月27日に発売される週刊新潮に広告記事を掲載いたします。この記事作成のため、11月29日に湧別町長、佐呂間町長とともに、取材を受けてまいりました。昨年は私一人で週刊文春に掲載しましたが、今年は両町長に入っていて、遠軽地区3町の現状や今までの取り組みを伝え、さらに遠軽地区の魅力を理解していただくことで、産婦人科医や小児科医がこの地域に赴任したいと思っただく動機付けとなるよう、また、「新医師臨床研修制度」の問題点を広く国民の皆様にご存知いただくことで、今後の働きかけに少しでもプラスとなるように、とのことでの記事になります。

さらに、私たち3町長だけではなくて、昨年赴任した遠軽厚生病院産婦人科の石川医師や、この地域で出産した方々からもご意見をいただき、先生の赴任理由や出産の喜びを中心に、より未来感のある内容としていく予定でございます。

これを機に、全国の皆様にご地方の現状を知っていただき、国に医療制度の抜本的な改革を訴えていくとともに、今後も産婦人科医師3人体制の確保に向けて、しっかり取り組んでまいりたいと思っております。皆様のご協力もお願いいたします。

なお、地域医療の取り組みといたしましては、厚生連病院・診療所所在地市町長会、並びに北海道厚生連からの緊急要請を受けまして、11月28日に関係する衆議院議員事務所を訪問し、診療報酬・介護報酬改定、医師確保対策及び医師の働き方改革、不採算医療に対する特別交付税措置見直し等について要請を行いましたので、併せてご報告いたします。

雑誌に掲載するというのは先ほど申しましたけれど、国に医療制度の抜本的な改革を訴えたいということです。医師を探して連れてくる方法も、ダイレクトメールなどでやっていますが、いついなくなるかわかりません。このままでは、同じことを繰り返していただければ明かかない。これは、地域医療に対する制度をしっかりとつくっていただかなければいけない。これは国でしかできないことだと思っております。そのためには、この地域の中だけで言っても意味がないと思っております。政治を動かすには、残念ながら東京、大都市の人たちの動きを、考えを変えなきゃいけないということで、こういった運動の仕方をしていくということでもあります。

それから、厚生病院の関係で要請に行ったということで、診療報酬の大幅な改定が行われるでしょう。これによって大きな病院の場合は経営が、がらっと変わるわけです。今も遠軽厚生病院は厳しい中で経営をしております。そういったものを何とかしなければいけない。それから、働き方改革があります。この働き方改革には我々も十分理解できる場所があります。しかしながら、これをあらゆる業種に一律に当てはめたときにどうなるかということがあります。今の遠軽厚生病院などに当てはめると、先生方の医者之魂とか、そういうものによって診療していただいている面があります。これがもし、働き方改革によって、一

律に勤務時間が設定されたとなると、患者さんを診られなくなるのは必然であるということ、先生たちの方から上がっておりまして、そのことも訴えてきたということでもあります。働き方改革自体について悪いと言っている訳ではございません。

■1964東京オリンピック遠軽町展示林及び、2020東京オリンピック・パラリンピックとの関わりについて

1964東京オリンピック遠軽町展示林につきまして、検討会議を設置し、木製品としての活用について協議を重ねてきておりました。

9月30日には試験伐倒を行いました。具体的な試作品の製作に向けて取り組みを進めるとともに、展示林そのものの活用として、緑のレガシーを継承していくために、種子採取体験会等を実施したところであります。

そのような中、2020東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会から「ビレッジプラザ事業協力者」の募集がありました。応募した結果、全国63の自治体選ばれ、遠軽町の木材も活用されることに決定いたしました。

これは、選手村に建設される交流施設であるビレッジプラザの建築資材として、製材加工した遠軽町の木材を提供し、大会終了後、解体された材の返還を受け、大会レガシーとして地元で有効活用しようという取り組みであります。

この決定に伴いまして、11月24日に東京都内で、組織委員会主催によりまず参加自治体への感謝状贈呈式に出席してまいりました。当日は、組織委員会の森喜朗会長から直接、感謝状を手渡され、感謝の辞をいただいたところであります。

このような関わりを足掛かりとして、本町展示林の活用に向けても、さらに取り組んでまいります。

この際に、森会長と私も1対1で話をすることができました。そしてさらに組織委員会の武藤事務総長、佐藤副事務総長とも相当突っ込んだ話を、私の方から売り込みをさせていただきました。その中で、佐藤さんは「そんなことあるのですか？」という話もいただいて、何とか活用していただきたいなと思っているところでございます。

■イベントなどについて

昨年の台風被害によりまして、道道が通行止めとなった影響を受けて中止しておりました、巨大氷柱となる山彦の滝の観察会及びナイトツアーを1月から実施いたします。神秘的な姿が好評をいただいておりますこのツアーに、復活しますので、ぜひご参加をお待ちしております。

次に、本町と湧別町を股にかけた国内最長のクロスカントリースキー大会であります「湧別原野オホーツククロスカントリースキー大会」が2月25日に開催されます。今回は36キロメートルのコースを廃止し、新たに10キロメートルのコースを設けました。これにより、さらに参加しやすい大会になったものと考えております。すでに参加者の募集を開始し、1月19日まで受け付けておりますので、多くの皆様の挑戦をお待ちしております。

今年3月には、えんがるロックバレースキー場を舞台に、本町ではスポーツの大会として初の国際大会であります「FISファーイーストカップ」が開催されました。この大会が、来年3月も引き続き開催されます。国内外からワールドカップ出場を目指す選手やスタッフが多数来町する見込みであり、本町といたしましても万全の体制で迎えらるよう準備を進めてまいります。世界で活躍するトップスキーヤーの滑りを間近に見られる絶好の機会ですので、ぜひ多くの皆様にご覧いただきたいと思っております。

また、地方創生推進交付金を活用して、冬期観光について検討を行っているところでありまして、3月上旬に、閉園している観光施設を活用し、観光客の確保と宿泊客の増加を目指した冬の核となる観光イベント実施に向けて準備を進めております。これには、他の団体が

行っている冬期イベントも合わせて実施する予定であります。詳細が決まりましたら、あらためてお知らせしたいと考えております。

最後に、遠軽地区総合開発期成会の専門部会として、3町の食材を使った特産品開発を目指している、YESプロジェクト推進会議では、1月17日にご当地グルメ開発に向けて試食会を開催いたします。今回は、飲食店の皆様に、カレー系のメニューを考案・調理し、持ち寄っていただく予定であります。

クロスカントリースキー大会につきましては、参加者は一時に比べて少なくなりました。ここで、止めるのはいつでも止められる、しかし、せっかくここまでやってきた財産です。これは、合併する前に白滝村、丸瀬布町、遠軽町、上湧別町ということでやっていた事業でありまして、これは何とかさらに続けてこれを100回とか、そうなれば世界的なものにもなるのであって、そういった意味で何とか頑張って続けていきたいと思っております。

そして、アルペンの大会、FISフェーイーストカップです。昨年初めてやって、この近辺にスタッフを含めて60人、それだけの外国人が来たのは初めてで、みんなびっくりしたということでありまして、もうちょっといろいろなおもてなしという話も出ていました。去年は運営してくれた皆さんがてんでこ舞いでやりました。今年は何とか、昨年よりもいろいろな面でグレードアップできた大会をやりたいと思います。スポンサーがアトミックカップ、デザートカップ、遠軽信用金庫杯ということで3日間のレースをやります。前はワールドカップで上位に入るようなドイツの選手も来ておりましたので、ぜひ皆さんにもPRをお願いしたいと思っております。

そして、冬の核となるイベント実施につきまして、夏は私どもの町にも合宿は結構入ってきて、宿も埋まっております。冬が北海道は大変でありまして、良いのはニセコとか富良野の話であって地方は大変です。そういった形で四苦八苦していろいろなアイデアを出してやっております。青年会議所でやっている雪提灯など、官民合わせてやっていきたいと思っております。

それから、YESプロジェクト推進会議、3町でやっております。これも、医療の関係も北海道から支援いただいています。これも私の方でそういう制度をつくってくれということやっております。我々のところはみんないろいろ考えるのだけれど、ものになっていないということで、何とかこれを早く、加速度的にやらなければいけないということでやっております。カレー系で今考えているようなことでもあります。これは皆さんにも事業内容がまとまってきたら宣伝の方をお願いしたいと思っております。

JRに関して、一昨日も北見で会議がありました。管内だけの会議をやって、それから石北線と釧網線部会に分けて会議をやっております。石北線部会のときは旭川の副市長も来て協議を重ねております。これから徐々にステージが上がってまいります。どんどん我々が地元としてできることを、スピード感を持ってまとめることが大事だと考えております。どんなことをしてでもこの石北本線は残さなければ、オホーツクが沈んでしまう。一次産業がもたなくなるということでもあります。これは北海道にとっても重要なことであるし、日本にとっても大事なことであるということから、石北本線の存続に向けて、ぜひ皆様方にもご協力をお願いしたいと思っております。